



TITLE:

<批評・紹介> 禹貢三周年記念號

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

---

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介> 禹貢三周年記念號. 東洋史研究 1937, 2(5): 495-499

ISSUE DATE:

1937-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138754>

RIGHT:

## 禹貢三周年記念號

第七卷第一二三合期

民國二十六年四月一日出版

民國二十三年三月誕生以來本年を以て三周年を迎へた禹貢半月刊は記念號として第七卷一、二、三號合刊を世に送つた。總頁數四百餘、收むる所の論文三十餘篇、勿論玉石混淆の弊はあるが眞に堂々たる體裁を備へてゐる。過去三年間、歴史地理學の専門雜誌として目覺しい發展を遂げ内容體裁共に著しく充實し、創刊後日淺きにも拘らず斯界に於ける指導者の地位に立つて活躍してゐる事は同慶の至りである。元來發刊詞にも述べられてある如く、沿革地理の研究を標榜して立つたものであるが、其動機は列強の帝國主義的侵略に對して民族意識を奮起せしむるにあるとしてゐる。先づ工作計畫として發表した者は、中國地理沿革史の編輯、沿革地圖の編製、地名辭典の編纂、歷代地理志の校訂等であつた。然し最近著しく目に附くのは邊疆專

號の續出であつて、昨年七月の西北研究以來、東北研究、回教與回族、後套水利調查、南洋華僑、康藏、更に又最近には回教の都合七種の專號を出してゐる。此は北支事件の發生に刺戟され邊疆問題の研究が喧しく論ぜられる時流に投じ、昨年管理中庚庚董事會から助成金の交附を受ける様になつてからの事である。本號の今後三年間の工作計畫の中にも國事日々に非にして民族衰亡の兆あるを恐れ、學問の爲に學問をするの態度は未だ目前の急を救ふ所以に非ず、亦學人にとつて學術救國の唯一の途でもないとして、先づ邊疆問題の關心を惹起するに力めんが爲邊疆の調査探險を第一の目標に掲げてゐる。従つて此等の内容は純粹の學術研究の態度を離れ、次第に政治的傾向を帶びて來たといふよりは寧ろ何れとも附かぬ無味乾燥なものに陥つてしまつてゐる。專號を作らんが爲には粗製濫造をも敢て辭せぬといふ感を抱かせる。邊事専門の雜誌ならば從來からいくらでもあるではないか。勿論中には興味ある研究や重要な調査報告もあるにはあるが、かゝる傾向の餘りにも露骨なものを遺憾とする。此と並行して昨年十月以來西域遺聞外三種を出した邊疆叢書や游

記叢書の出版があり、顧頤剛、鄭德坤兩氏の編纂に係る地圖底本がある。此は既に甲種二百萬分一、二十六幅と乙丙種各數幅を出してゐるが、山を表はす毛羽の餘りに多すぎる事や刷りの濃すぎる事などは地圖底本として聊か不適當であるが、此の種の企ては我が國に於ても範とせねばならぬ。

更に今後三年間の計畫を見るに、邊疆探險記の編譯あり、古書、正史、歷代地理書地名索引の編纂あり、沿革地圖の繪製あり、又專題研究として歷代正史地理志の校訂註釋を始め、中國内部小民族の研究、歷代北部邊防の研究等々を掲げてゐる。正史地理志の校訂註釋の如き最も重要な基礎的の事業であつて、一日も早く其業績が連載されん事を祈る。嘗て發表された史念海氏の「兩漢郡國縣邑増損表」、于鶴年氏の同訂誤、馮家昇氏の「兩唐書地理志互勘」、聶崇岐氏の「宋史地理志校異」、馮氏の「遼金史地理志互校」、或は本號を以て漸く完成したらしい趙泉澄氏の「清代地理沿革表」の如き多少の粗漏は免れぬとしても吾人を益する事大である。特に聶・趙二氏の努力に敬意を表する。小さなものではあるが袁鍾姁女史の「漢書地理志中掌物產

之官」とか、鄧嗣禹氏の「唐代礦物產地表」の如き一覽表もなか／＼便利重寶である。待望の地名索引は先づ十三經・二十二子・前四史が漸く本年一月から着手せられた様であるから未だ前途遼遠ではあるが、索引組の異常な努力に依て案外早く完成するかも知れぬ。

さて本號の内容紹介に移るが何と言つても先づ蒙文通氏の大作「赤狄白狄東侵考」を挙げねばならぬ。春秋戰國時代は歷史上北方民族が最初の大發展を遂げた時であるが、春秋左傳より狄に關係ある記事を探集配列し、獨特の興味ある觀察に依て狄族の東方移動を巧みに説明し、各所に嶄新な意見が盛られてゐる。氏の古代史研究に對する意見や方法は早く古史甄微に伺はれるが、近年に於ても屢々奇拔な新説を吐いてゐる。

本文は昨年十二月に發表した「犬戎東侵考」や「秦爲戎族考」等と一聯をなすものであらう。嚴密な批判は他日に譲り一應其梗概を紹介する。宣王の當時涇水の陽に居つた狄は、周の東遷後次第に北して河西の地を占め、魯の莊・閔の頃突如大移動を始めて晋北に徙り更に晋東に走り太行山脈に沿つて南下し刑・衛を亡し鄭國に迫つた。齊の桓公は極力之を防止して河南を侵

さしめず、狄は西南して周畿に肉迫したが遂に晉の文公の爲に大打撃を與へられる。こゝに狄の侵略は河を渡つて東し魯・齊が其銳鋒に當る事となる。此の頃北方に居た長狄や北戎は赤狄の東遷と共に之に服し約六十年の間東夏の侵略に従つたのであつた、魯の文公の頃からかく北邊全體に互つて大勢力を振つてゐた狄族の間に分裂を生じ、次で彼等の盟主となつて衆狄を牛耳つてゐた赤狄潞氏が晉に亡ぼされると狄禍は一時影を潛める。そこで北戎は北して代國を立て、山戎は代北に走つて無終を保ち更に西して秦・韓の邊に居る。山戎即ち貊であつて先に狄の東遷を導いて共に東した者であつた。後に起る胡の前身である。狄の分裂は白狄の赤狄からの離反となり、赤狄の亡後五十年餘りにして秦・晉の間に居つた白狄は赤狄の故道を通つて東し又太行に沿つて南した。其間白狄を統御した者は先に於ては無終、後には鮮虞である。鮮虞は中山國を立て北方に雄視するが、趙に亡ぼされ一段回復するも終に趙の爲に國を奪はれ、太行山系の白狄は此處に全く禍を絶つたのである。蒙氏は墨子に就いても面白い考を述べてゐる。墨翟は孤竹の後にして中國の人に非ず

小戎に従て宋魯の間に入つた者であつて墨學は元來異族の學である。韓非子に哀公儒にして削られ代君墨にして亡ぶとある。孤竹も北狄も共に河北の異族であつて、其等の間に墨學が行はれるのは魯に儒あるが如く然りである。中山國にも墨學が盛であつたが、此は山東にも近いだけ儒學も行はれてゐたのである。以上は其大體であるが、北方民族の疾風の様な移動を假定として古代の狄族に對する疑問を解釋してゐる。果して赤狄の移動後僅々五十年で又白狄の移動あるを説く如き餘りにも巧妙な觀があるが、色々の點で示唆に富む論文である。或は墨學に對する意見に就いても、嘗て顧頡剛氏と共に「墨子姓氏辨」(史學集刊二期)を著した童書業氏は之を駁して孤竹の裔が山戎に従て魯に入つたといふは全く想像説なる事、代が亡んだのは殆んど墨子が生れた許りの時であつたらう等の事を擧げてゐるのは一應尤もであるが韓非子の一條を戰國秦漢策士杜選の言として却けてゐるのはどうかと思ふ。(禹貢七ノ五 通説一東) 顧頡剛氏の「讀尙書禹貢篇之偽孔傳與孔氏正義」は流石に簡潔な文章を以て偽孔傳と鄭・王兩說との異同を例示し、偽孔傳の作者を以て王肅と略々同時代其影

響を受けた者の爲る所と斷じ、其の作者の地理に關する實際的知識の缺乏を指摘し、疏に對しては傳の說の事實に違背するを知つても尙之を曲解し或は文字に牽強附會の說を假託するを難する一方、又其の持論通達する者があるのを舉げて註疏の性質を一目瞭然に説いたものである。

孟森氏の「水經注原公水篇諸家之訂正」は最近相次で「擬梁曜北答段懋堂論戴趙二家水經注」〔文獻〕や「楊守敬所學趙氏水經注釋製戴氏嫌疑辯」〔北平圖書館館刊〕等著はして、新出の永樂大典本を利用し戴震の剽竊を手厳しく難じた氏が、此又同様に原公水の一節を以て戴本の脫文訂正が趙氏を盗み更に故意に本文を變へてゐるのを指摘したものである。しかし趙一清の本といへども現在のものは其原形でなく彼の死後年と共に變化して行つたであらうといふ立場を持するならば、他の事が言へるであらう。尙水經注に關しては趙貞信氏の「酈道元之生卒年考」がある。嘗て丁山氏は「酈學考序目」〔國立中央研究院歷史語言研究所集刊第三本第三分〕の中に詳細な年譜を編してゐるが、趙氏は道元の生年に就いて幾分の確實な根據を舉げ、其父酈範の死を丁氏が太和十七年以前と

したのに對し更に十六年以前と考定する等一步を進めたものであるが、範が二度青州刺史に任ぜられたとするのは如何であらうか。それにしても丁氏と殆んど同じ結論に達して居り乍らそれに就いては一言觸れる所がないのは奇怪な事であつて、丁氏の論文を並讀するを忘れてはならぬ。

史念海氏の「西漢淮南三國考」は漢書地理志の廬江・淮南・六安の三國の分合變遷の跡を史記漢書の精密な引用に依て考證したものである。氏は西漢侯國考を研究專題とし其の一部は既に發表されてゐるが、此の研究が續々現はれて漢書地理志の研究が次第に進められるのは喜ばしい事である。

譚其驤氏の「粵東初民考」は、粵東の最も原始的な民族は、南方民族の通稱である越や蠻でもなく況や後に遷徙して來た蠻や獠でもなく、實に今日の海南島の黎族であつて後漢書や隋書地理志に見える里又は俚人である。而して俚族の極盛時代は梁より唐に至る百餘年間であつたといふ。于省吾氏の「武王伐紂行程考」は荀子儒效篇の文を解いたもので、臧といふ地名が盤庚に見える事と百泉が甲骨文に求め得られる事とを

氏の創見とする。劉節氏の「說攻吳與禺邦」は近出の禺邦王壺の銘を提示して、禺、嶠、魯、吳等は皆魚の象形字或は其音の轉じたものであつて何れも海鹽業魚の民の名稱であり、太伯の奔つたといふ吳は決してかゝる浙江の吳ではなく山・陝の間にある虞國であつたらうと説く。前に郭沫若氏の兩周金文辭大系を批評した（北平圖書館館刊六卷三號「兩周金文辭大系商兌」）時に述べた意見を發展させたものである。其他唐蘭氏の「天問阻窮西征新解」、錢穆氏の「再論楚辭地名答方君」、馮家昇氏の「豆莫婁國考」等があるが紙面の都合上紹介を割愛する。又長城の研究家張維華氏の「齊長城考」の如きは三十頁に上る長論文であるが徒らに叙述冗慢にして一向に價值なきものと信ずる。

（日比野丈夫）